

鎮西八郎

楠山正雄

青空文庫

はちまんならうよしえ
 八幡太郎義家から三代めの源氏の大将を六条判官為義といいました。為
 めよし
 義はたいそうな子福者で、男の子供だけでも十四五人もありました。そのうちで一番
 上のにいさんの義朝は、頼朝や義経のおとうさんに当たる人で、なかなか強い大
 将ようでしたけれど、それよりもつと強い、それこそ先祖の八幡太郎に負けないほどの
 強い大將たいしょうというのは、八男の鎮西八郎ちんせい はちろう為朝ためともでした。
 なぜ為朝を鎮西八郎というかといいますが、それはこういうわけです。いったい
 この為朝ためともは子供のうちからほかの兄弟きょうだいたちとは一人ちがつて、体もつと大きいし、
 ちからつよ
 力が強くつて、勇気ゆうきがあつて、世の中に何一つこわいというものもない少年しょうねんでした。
 それに生まれつき弓ゆみを射ることがたいそう上手じょうずで、それこそ八幡太郎の生まれかわり
 だといわれるほどでした。それどころか、八幡太郎は弓の名人めいじんでしたけれど、人並み
 とちがった強い弓つよ ゆみを引くということはなかつたのですが、為朝ためともは背の高さが七尺しやくもあつ
 て、力の強い上に、腕うでが人並みより長く、とりわけ左の手が右の手より四寸すんも長かつたも

のですから、並みの二倍もある強い弓に、二倍もある長い矢をつがえては引いたのです。ですから為朝の射る矢は、並みの人の矢がやつと一町か二町走るところを五町も六町の先まで飛んで行き、ただ一矢で敵の三人や四人手負わせないことはないくらいでした。

こんなふうですから、子供の時から強くつて、けんかをして、ほかの兄弟たちはみんな負かされてしまいました。兄弟たちは為朝が半分はこわいし、半分はに

くらしがつて、何かにつけてはおとうさんの為義の所へ行つては、八郎がいけない、いけないというものですから、為義もうるさがつて、度々為朝をしかったです。いくらしかられても為朝は平気で、あいかわらず、いたずらばかりするものですから、為義も困りきつて、ある時、

「お前のような乱暴者を都へ置くと、今にどんなことをしでかすかわからない。今日からどこへでも好きな所へ行つてしまえ。」

といつて、うちから追い出してしまいました。その時為朝はやつと十三になつたばかりでした。

うちから追い出されても、為朝はいっこう困つた顔もしないで、

「いじのわるいにいさんたちや、小言ばかりいうおとうさんなんか、そばにいない方がいい

い。ああ、これでのうのうした。」
 と心こころの中で思おもつて、家来けらいもつれずたつた一人ひとり、どこというあてもなく運うんだめしに出かけました。

二

くにぐに ほうぼう
 国々を方々めぐりあるいて、為朝ためともはどうとう九州きゅうしゅうに渡わたりました。その時じぶんき分九州きゅうしゅうのうちには、たくさんの大名だいみょうがあつて、めいめい国くにを分わけ取りとりにしてしました。そしてそのてんでんの国くににかめしいお城しろをかまえて、少すこしでも領分りょうぶんをひろめようというので、お隣となり同士どうし始終しじゅう戦争せんそうばかりしあつていました。
 ためとも
 為朝ためともは九州きゅうしゅうに下くだると、さつそく肥後ひごの国くにに根城ねじろを定め、阿蘇あそのたたくに大だい名みよを家来けらいにして、自分じぶん勝手に九州きゅうしゅうの総追捕使そうついほしという役やくになつて、九州きゅうしゅうの大だい名みょうを残のこらず打ち従したがえようとはしました。九州きゅうしゅうの総追捕使そうついほしというのは、九州きゅうしゅうの総督そうとくという意味いみなのです。すると外ほかの大だい名みょうたちは、これも半分はんぶんはこわいし、半分はんぶんはいまいますがつて、

「為朝は総追捕使だなんぞと行って、いばっているが、いったいだれからゆるされたのだ。生意気な小僧じやないか。」

「と、いいいい、てんでんのお城に立てこもつて、為朝が攻めて来たら、あべこべにたたき伏せてやろうと待ちかまえていました。」

為朝は聞くと笑つて、

「はッは。たかが九州の小大名のくせに、ばかなやつらだ。いったいおれを何だと思つてゐるのだろう。子供だつて、りっぱな源氏の自家の八男じやないか。」

「こういつて、すぐ阿蘇忠国を案内者にして、わずかな味方の兵を連れたなり、九州の城という城を片つぱしからめぐり歩いて、十三の年の春から十五の年の秋まで、大戦だけでも二十何度、その外小さな戦は数のしれないほどやって、攻め落とした城の数だけでも何十箇所というくらいでした。それで三年めの末にはとうとう九州残らず打ち従えて、こんどこそほんとうに総追捕使になつてしまいました。」

すると為朝に打ち従えられた大名たちは、うわべは降参した体に見せかけながら、腹の中ではくやくつてくやくつてなりませんでした。そこでそつと都に使いを立てて、為朝が九州に来てさんざん乱暴を働いたこと、天子さまのお許しも受けな

いで、自分勝手に九州の総追捕使になったことなどをくわしく手紙に書き、その上に為朝の悪口を有ること無いことたくさんにならべて、どうか一日も早く為朝をつかまえて、九州の人民の難儀をお救い下さいと申し上げました。

天子さまはたいそうお驚きになって、さつそく役人をやつて為朝をお呼び返しになりました。けれども為朝は、

「きつとこれはだれかが天子さまに讒言したにちがいない。天子さまには、間違いだからといって、よく申し上げてくれ。」

といつて、役人を追い返してしまいました。

為朝がいうことをきかないので、天子さまはお怒りになって、子供の悪いのは親のせいだからというので、おとうさんの為義を免職して、隠居させておしまいになりました。

為朝は、おとうさんが自分の代わりに罰を受けたということ聞きますと、はじめてびっくりしました。

「おれは天子さまのお罰をうけることをこわがって、都へ行かないのではない。それを自分が行かないために、年を取られたおとうさんがおとがめをうけるといふのはお気の毒な

ことだ。そういうわけなら一日も早く都に上つて、おとうさんの代わりにどんなおしおきでも受けることにしよう。」

こういつて為朝はさつそく今の楽しい身分をぽんと棄てて、前に下つて来た時と同様、家来も連れずたった一人でひよつこり都へ歸つて行こうとしました。ところが長い間為朝になつて、影身にそうように片時もそばをはなれない二十八騎の武士が、どうしてもお供について行きたいといつてききませんので、為朝も困つて、これだけはいつしよに連れて都に上ることにしました。

こういうわけで九州から為朝について来た家来は二十八騎だけでしたが、どうしてもお供がでなければ、せめて途中までお見送りがしたいといつて、いくら断つても、どこまでも、どこまでも、そろそろついてくる家来たちの数はそれはそれはおびただしいものでした。為朝は力が強いばかりでなく、おとうさんに孝心ぶかいと同様、だれに向かつても情けぶかい、心のやさしい人でしたから、三年いるうちにこんなにおおぜいの大勢の人から慕われて、ほんとうに九州の王さま同様だったのです。それでだれいとうなく、為朝のことを鎮西八郎と呼ぶようになりました。鎮西というのは西の国ということで、九州の異名でございませぬ。

さて為朝ためとちは一日いちにちも早くおとうさんを窮きゆうくつ 屈くつなおしこめから出だしてあげたいと思おもつて、
 急いそいで都みやこに上のぼりました。ところが上のぼつてみておどろいたことには、都みやこの中なかはざわざわ物もの
 騒さわがしくつて、今いまに戦せん争そうがはじまるのだといつて、人じん民みんたちはみんなうろたえて右みぎ
ひだりに逃にげ廻まわつていました。どうしたのだらうと思おもつて聞きくと、なんでも今いまの天子てんしさまの
 後ご白しら河かわ天皇てんのうさまと、とうにお位くらいをおすべりになつて新しん院いんとおよばれになつた先さきの天子てんし
 さまの崇す徳とく院いんさまとの間あいだに行いきちがいができて、敵てき味み方かたに別わかれて戦せん争そうをなさろうと
 いうのでした。朝ちやう廷ていが二派ふたはに分わかれたものですから、自しぜ然ぜんおそばの武ぶ士したちの仲なか間まも
 二派ふたはに分わかれました。そして、後ご白しら河かわ天皇てんのうの方ほうへは源みなもと義よしのと朝ちやう代だいの平たい清けい盛さかだの
 源みなもと三さん位い頼たの政まさだのという、そのころ一いっばん名な高たかい大たい将しようたちが残のこらずお味み方かたに上あがり
 ましたから、新しん院いんの方ほうでも負まけず強つよい大たい将しようたちをお集あつめになるつもりで、まづお
 とがめをうけて押おしこめられている六ろく条じやう判はん官くわん為ため義よしの罪つみをゆるして、味み方かたの大たい将しよう
 軍ぐんになさいました。為ため義よしはもう七十ななじゅうの上うへを出でた年とし寄よりのことでもあり、天てん子しさま同どう士し

のお争いでは、どちらのお身方みかたをしてもぐあいが悪わるいと思おもつて、

「わたくしはこのまま引き籠こもつていとうございます。」

といつて、はじめはお断ことわりを申し上げたのですが、どうしてもお聞き入れにならないので、しかたなしに長ちようなん男おとこの義朝よしともをのけた外ほかの子供こどもたちを残のこらず連れて、新院しんいんの御所ごしよに上あがることになりました。

そういうさわぎの中に為朝ためともがひよっこり帰かえつて来たのです。為義ためよしももう昔むかしのように為朝ためともをしかつているひまはありません。大おおよろこびで、さつそく為朝ためともを味方みかたに加くわえて、みんなすぐと出陣しゆつじんの用意よういにとりかかりました。

四

為朝ためともはやがて二十八騎きの家来けらいをつれて新院しんいんの御所ごしよに上あがりました。新院しんいんは味方みかたの勢せいが少すくないので心配しんぱいしておいでになるところでしたから、為朝ためともが来たとお聞きになり、ますと、たいそうおよろこびになって、さつそくおそばに呼よんで、

「いくさの駆け引きかひはどうしたものだろう。」

とおたずねになりました。すると為朝はおそれ気もなく、はつきりと力のこもった口調で、

「わたくしは久しく九州に居りまして、何十度となくいくさをいたしました。こちらから寄せて敵を攻めますにも、敵を引きうけて戦いますにも、夜討ちにまさるものはございませぬ。今夜これからすぐ敵の本營の高松殿におしよせて、三方から火をつけて焼き立てた上、向かつてくる敵を一方に引き受けてはげしく攻め立てることにいたしました。よう。そうすると、火に追われて逃げてくるものは矢で射とります。矢をおそれ逃げて行くものは火に焼き立てられて命を失います。いづれにしても敵は袋の中のねずみ同様、手も足も出せるものではございませぬ。それにあちらへお味方に上がった武士の中で、いくらか手ごわいのはわたくしの兄義朝一人でございませぬが、これとてもわたくしが矢先にかけて打ち倒してしまいます。まして清盛などが人なみにひよろひよろ矢の一つ二つ射かけましたところで、ついこの鎧の袖ではね返してしまふまででございませぬ。まあ、わたくしの考えでは、夜の明けるまでもございませぬ。まだくらいうちに勝負はついてしまひませぬ。御安心下さいませし。」

といたしました。

為朝ためともがこうりつぱに言いきりますと、新院しんいんはじめおそぼの人ひとたちは、「なるほど。」
と思つて、よけい為朝ためともをたのもしく思いました。するとその中で一人左大臣ひとりさだいじんの頼長よりなが
があざ笑つて、

「ばかなことをいえ。夜討ようちうちなどということは、お前まえなどの仲間なかまの二十騎にじゅうきか三十騎さんじゅうきでやる
けんか同様のどうよう小ぜりあいならば知らぬこと、恐れ多くも天皇てんのうと上皇じょうこうのお争あらしいから、
源氏げんじと平家へいけが敵味方てきみかたに分かれて力くらべをしようという大いさだ。そんな卑怯ひきょうな駆か
け引きはできぬ。やはり夜の明あけるのを待つて、堂々どうどうと勝負しょうぶを争あう外ほかはない。」

といつて、せつかくの為朝ためとものはかりごとをとり上げようともしませんでした。

為朝ためともは、おもしろく思おもいませんでしたけれど、むりに争あつてもむだだと思おもいましたか
ら、そのままおじぎをして退しりぞきました。そして心こころの中では、

「何もなにしらない公卿くけのくせによけいな差さし出口でぐちをするはいいが、今いまにあべこべに敵てきから夜よ
討うちちをしかけられて、その時ときにあわてもどうにもなるまい。こんなふうでは、この戦いくさに
はとても勝かてる見込みこみはない。まあ、働はたらけるだけ働はたらいて、あとはいさぎよく討うちち死じにをし
よう。」

と思おもいました。

こう覚悟をきめると、それからもう為朝はぴったり黙り込んだまま、しずかに敵の寄せてくるのを待っていました。

すると案の定、その晩夜中近くなつて、敵は義朝と清盛を大将にして、どんな夜討ちをしかけて来ました。

頼長はまさかと思つた夜討ちがはじまつたものですから、今更のようにあわてて、為朝のいうことを聞かなかつたことを後悔しました。そして為朝の御機嫌をとるつもりで、急に新院に願つて為朝を蔵人という重い役にとり立てようといひました。すると為朝はあざ笑つて、

「敵が攻めて来たというのに、よけいなことをする手間で、なぜ早く敵を防ぐ用意をしないのです。蔵人でもなんでもかまいません。わたしはあくまで鎮西八郎です。」

とこうりつぱにいいきつて、すぐ戦場に向かつて行きました。

為朝が例の二十八騎をつれて西の門を守つておりますと、そこへ清盛と重盛を大将にして平家の軍勢がおしよせて来ました。

為朝はそれを見て、

「弱虫の平家め、おどかして追いはらつてやれ。」

と思ひまして、敵がろくろく近づいて来ないうちに、弓に矢をつがえて敵の先手に向かつて射かけますと、この矢が前に立つて進んで来た伊藤六の胸板をみごとに射ぬいて、つきぬけた矢が後ろにいた伊藤五の鎧の袖に立ちました。

伊藤五がおどろいて、その矢をぬいて清盛の所へもって行って見せますと、並みの二倍もある太い籠の先に大のみのようなやじりがついていました。清盛はそれを見たばかりでふるえ上がって、

「なんでもこの門を破れという仰せをうけたわけでもないのだから、そんならんぼう者のいない外の門に向かうことにしよう。」

と勝手なことをいいながら、どんどん逃げ出して行きました。

するとこんどはにいさんの義朝が平家の代わりに向かつて来ました。にいさんはにいさんだけの威光で、いきなりしかりつけて為朝を恐れ入らしてやろうと思つたと見えて、義朝は為朝の顔の見えるところまで来ますと、大きな声で、

「そこにいるのは八郎だな。にいさんに向かつて弓をひくやつがあるか。はやく弓矢を投げ出して降参しないか。」

といいました。

すると為朝は笑つて、

「にいさんに弓をひくのがわるければ、おとうさんに向かつて弓をひくあなたはもつとわるいでしよう。」

とやり込めました。

これで義朝もへいこうして、だまつてしまいました。そしてくやしきまぎれに、はげしく味方にさしずをして、めちやめちやに矢を射かけさせました。

為朝はこの様子をこちらから見て、大將の義朝をさえ射落とせば、一度に勝負がついてしまうのだと考えました。そこで弓に矢をつがえて、義朝の方にねらいをつけました。

「あの仰むけている首筋を射てやろうか。だいぶ厚い鎧を着ているが、あの上から胸板を射とおすぐらいさしてむずかしくもなさそうだ。」

こう為朝は思いながら、すぐ矢を放そうとしましたが、ふと、

「いや待て。いくら敵でもにいさんはにいさんだ。それにこうして父子わかれわかれになつていても、おとうさんとにいさんの間に内しよの約束があつて、どちらが負けてもお互いに助け合うことになつているのかもしれない。」

と思ひ返して、わざとねらいをはずして、義朝の兜に射あてました。すると矢は兜の星を射けずって、その後ろの門の七八寸もあるうという扉をぶすりと射ぬきました。これだけで義朝は胆を冷して、これも外の門へ逃げ出して行きました。

こうして為朝一人に射すくめられて、その守っている門にはだれも近づきませんでしたが、なんといっても向こうは人数が多い上に、こちらの油断につけ込んで夜討ちをしかけて来たのですから、はじめから元気がちがいます。とうとう外の門が一つ一つ片はしからうち破られ、やがてどつと総くずれになりました。

こうなると為朝一人いかに力んでもどうもなりません。例の二十八騎もちりぢりになつてしまったので、ただ一人近江の方へ落ちて行きました。

その後、新院はおとらわれになつて、讃岐の国に流され、頼長は逃げて行く途中だれが射たもしれない矢に射られて死にました。

おとうさんの為義はじめ兄弟たちは残らずつかまつて、首をきられてしまひました。

その中で為朝は一人、いつまでもつかまらずに、近江の田舎にかくれていましたが、戦の時にうけたひじの矢きずがはれて、ひどく痛み出したものですから、ある時近所の

温泉おんせんに入はいつて矢やきずのりようじをしていました。するとかねてから為朝ためとものゆくえをさがしていた平家へいけの討うつ手てが向むかつて、為朝ためともの油断ゆだんをねらつて、大勢おおせい一度いどにおそいかかつてつかまえてしまいました。

為朝ためともはそれから京都きょうとへ引ひかれて、首くびをきられるはずでしたが、天子てんしさまは為朝ためともの武勇ぶゆうをお聞ききになつて、

「そういう勇士ゆうしをむぎむぎと殺ころすのはもつたない。なんとかして助たすけてやったらどうか」

とおつしやいました。そこで為朝ためともの死罪しざいを許ゆるして、その代り強つよい弓ゆみの引ひけないように、ひじの筋すじを抜ぬいて伊豆いずの大島おおしまに流ながしました。

為朝ためともは筋すじを抜ぬかれて弓ゆみは少すこし弱よわくなりましたが、ひじがのびたので、前まえよりもかえつて長ながい矢やを射いることができるようになりました。

五

為朝ためともは大島おおしまへ渡わたると、

「おれは八幡太郎の孫だ。この島は天子さまから頂いたものだ。」

と云つて、島を討ち従えてしまいました。そのうち方々にかくれていた為朝の家人が、一人二人とだんだん集まつて来て為朝につききました。

「九州よりはずつと小さいが、また為朝の国ができた。」

こう云つて、為朝はここでも王さまのような威勢になりました。

ある時為朝は海ばたに出て、はるか沖の方をながめていますと、白いさぎと青いさぎが二羽つれ立つて海の上を飛んで行きます。為朝はそれをながめて、

「わしかなんぞなら知らないが、さぎのような羽の弱いものでは、せいぜい一里か二里ぐらいしか飛ぶ力はないはずだ。それがああして行くところを見ると、きつとここからそう遠くないところに島があるにちがいない。」

と云つて、そのまま小船にとび乗つて、さぎの飛んで行つた方角に向かつてどこまでもこいで行きました。

その日一日こいで、海の上で日がくれましたが、島らしいものは見つかりません。夜はちようど月のいいのを幸いに、またどこまでもこいで行きますと、明け方になつて、やつと島らしいものの形が見えました。

為朝はだんだんそばへよつてみますと、岸は岩がけわしい上に波が高いので、船が着けられません。さんざん回りをこぎ回りますと、やっと平らな州のようところがあつて、島の中から小さな川がそこに流れ出していました。

為朝はそこから上がつて、ずんずん奥へ入つて見ますと、一めん、岩でたたんだような土地で、田もなければ畠もありません。ところどころに見なれない草木が生えて、珍しい匂いの花が咲いていました。

いくら歩いてても家らしいものも見えませんでした、そのうちいつどこから出て来たか、一丈も背の高さのある大男がのそのそと出て来ました。まっくろな体に毛がもじやもじや生えて、頭の髪の毛はまっ赤で、針を植えたようでした。

為朝は不思議に思つて、

「この島は何という島だ。」

と大男の一人に聞きますと、

「鬼ガ島といひます。」

とこたえました。

為朝は、いよいよ珍しく思つて、

「じゃあお前たちは鬼か。それとも先祖が鬼だったのか。」
とたずねました。

「そうです。わたくしどもは鬼の子孫です。」

「鬼ガ島なら、宝があるだろう。」

「むかしほんとうの鬼だった時分には、かくれみなの、かくれがさだの、水の上を浮く靴だのというものがあつたのですが、今では半分人間になつてしまつて、そういう宝もいつの間にかなくなつてしまいました。」

「よその島へ渡つたことはないか。」

「むかしは船がなくなつても、ずんずん、よその島へ行つて、人をとつたりしたこともありましたが、今では船もないし、たまによそから風にふきつけられてくる船があつても、波が荒いので、岸に上がろうとすると岩にぶつかつて碎けてしまうのです。」

「何を食べて生きています。」

「魚と鳥を食べます。魚はひとりで磯に上がつて来ます。穴を掘つてその中にかくれて、鳥の声をまねていると、鳥はだまされて穴の中にとび込んで来ます。それをとつて食べるのです。」

こういつている時に、ひよどりのような鳥がたくさん空の上をかけつて来ました。為朝はもつて来た弓に矢をつがえて、鳥に向かつて射かけますと、すぐ五六羽ばたばたと重なり合つて落ちて来ました。

島の大男は弓矢を見たのは初めてなので、目をまるくして見ていましたが、空を飛んでいゝるものが、射落とされたのを見て、舌をまいておじおそれました。そして為朝を神さまのように敬いました。

為朝は鬼ガ島を平らげたついでに、ずんずん船をこぎすすめて、やがて伊豆の島々を残らず自分の領分にしてしまいました。そして鬼ガ島から大男を一人つれて、大島へ帰つて来ました。

大島の者は、為朝が小船に乗つて出たなり未だに帰つて来ないので、どうしたのかと思つていますと、ある日恐ろしい鬼をつれてひよっこり帰つて来たので、みんなびっくりしてしまいました。

こうして為朝は十年たないうちに、たくさんの島を討ち従えて、海の王さまのような勢いになりました。すると為朝のために大島を追われた役人がぐやしがって、ある時都に上り、為朝が伊豆の七島を勝手に奪つた上に、鬼方島から鬼をつれて来て、らんぼうを働かせている、捨てて置くと、今にまた謀反の戦をおこすかもしれませんといつて訴えました。

天子さまはたいそうおおどろきになり、伊豆の国司の狩野介茂光というものにたくさんの兵をつけて、二十余艘の船で大島をお攻めさせになりました。

為朝は岸の上からはるかに敵の船の帆かげを見ると、あざ笑いながら、

「久しぶりで腕だめしをするか。」

といて、例の強い弓に長い矢をつがえて、まつ先に進んだ大きな船の胴腹をめがけて矢を射込みました。すると船はみごとに大穴があいて、たくさんの兵を乗せたまま、ぶくぶくと海の中に沈んでしまいました。敵はあわてて海の中でしどろもどろに乱れて騒ぎはじめました。

為朝はつづいて二の矢をつがえようとしたが、船を沈められた大ぜいの敵兵が、おぼれまいとして水の中であつぷ、あつぷもがいている様子を見ると、ふとかわいそうに

なつて、

「かれらはいいつけられて為朝ためともを討うちに来たというだけで、もとよりおれにはあだも恨うらみもない者ものどもだ。そんなものの命いのちをこの上むだにとるには忍しのびない。それにいつたんこうして敵てきを退しりぞけたところで、朝ちようてき敵てきになつていつまでも手向てむかいがしつづけられるものではない。考かんがえて見みると、おれもいろいろおもしろいことをして来たから、もう死しんでも惜おしくはない。おれがここで一人死ひとりしんでやれば、大ぜいの命いのちが助たすかるわけだ。」

こういつて、為朝ためともはそのままうちにかえつて、自じぶん分の居間いまにはいると、しずかに切せつぷ腹くして死しんでしまいました。

そのあとで寄せ手よせては、こわごわ島しまに上あがって見みて、為朝ためともが一人ひとりでりつぱに死しんでいるのを見みてまたびつくりしました。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

※「鬼ガ島」の「ガ」は底本では小書きになっています。

入力：鈴木厚司

校正：今井忠夫

2004年1月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鎮西八郎

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>